

機関番号：32641

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520063

研究課題名（和文）インド仏教衰亡に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental study on decline of Indian Buddhism

研究代表者 保坂俊司

(HOSAKA SHUNJI)

中央大学・総合政策学部・教授

研究者番号：80245274

研究成果の概要（和文）：

世界的に見ても立ち後れた領域であるインド仏教の衰亡研究の欠を補うべく、本プロジェクトでは、文献資料の不足については、イスラームの文献やサンスクリット語以外の民族言語史料を用い、また方法論では他宗教の衰亡との比較を比較宗教学、比較思想、比較文明学を用いて検討した。また、同テーマに対する国際的な関心を喚起すべく多くの国際会議やワークショップに参加し、インド、中国、韓国、スリランカなどの研究者とのネットワークを構築した。

研究成果の概要（英文）：

The issue of the decline of Buddhism in India has baffled not only many of the Buddhist scholars, but also other historians who have been interested in this theme. Still now, this subject has largely ignores by scholars and as a result has remained inadequately researched. One of major reason is the paucity of epigraphic materials and the silence of indigenous literature. I have tried to change this situation by innovating new approaches and made a research circle for this issue.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1, 200, 000	360, 000	1, 560, 000
平成 20 年度	1, 100, 000	330, 000	1, 430, 000
平成 21 年度	600, 000	180, 000	780, 000
平成 22 年度	300, 000	90, 000	390, 000
年度			
総計	3, 200, 000	960, 000	4, 100, 000

研究分野：宗教学、インド思想、比較文明

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：インド仏教の衰亡、イスラーム

文献、廃仏毀釈、比較宗教、宗教と政治

普遍宗教と民族宗教、仏教政治思想、比較文明

1. 研究開始当初の背景

東部ユーラシア地域に於いて最も広く敷衍している宗教である仏教は、その発生地であるインドにおいて衰滅して久しい。しかし、インド仏教の衰亡に関する研究は、殆ど為されてこなかった。それは日本においてのみならず

世界的な現象であった。一方でインド仏教の興隆に関する研究は、枚挙にいとまがない程に多様であり、多量である。しかし、仏教の衰滅に関する研究は、殆ど為されてこなかった。この仏教、インド宗教史さらには文明論的な研究領域の欠を埋めることが学

問的にも、また、インド仏教の衰滅とイスラームのインド、中央アジア、東南アジアへの拡大が密接に関わっていることから、本研究が、イスラームの拡大が世界各地で大きな軌轍を生んでいる現代の国際社会、近未来的な世界動向分析への貴重な資料となることが期待された。

更に、本プロジェクトの目的には、他に、玄奘三蔵の『大唐西域記』の記述において不明あるいは疑問がもたれる点、さらにその旅程の再検討などを、イスラーム史料との対照研究と現地調査があった。また、筆者にとってインド仏教の衰亡研究は、単にインドにおける仏教という一宗教の衰亡の原因を究明する道を開くことに止まらず、他地域における仏教と土着宗教との相克との比較研究、つまり廃仏運動のメカニズムについて明らかにする事を目指した。しかし、世界的にみてインド仏教衰亡への関心は薄く、本テーマに関心を持つ学者の発掘や相互の連携関係の構築が望まれた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく分けて三つを設定した。

(1)

インド仏教研において遅れていた研究領域の解消を目指す。

(1)の視点から、インド仏教の衰亡に関する研究は、背景の部分でも述べた通り、歴史的にみても、また現在の学会の状況においてもその重要性にも拘わらず、殆ど為されてこなかった。しかし、三大普遍宗教の筆頭とも位置づけられる仏教、その仏教が故国インドにおいて隆盛を極めたにもかかわらず衰退し、さらに事実上滅亡したという事実について、その背景や理由を明らかにしようとする試みは、インド仏教史のみならず宗教史上においても決して見過ごしてはならない問題である。しかし、このような大きなテーマが、殆ど手つかずの状態で放置された理由は、その文献資料の絶対量の不足、さらには方法論上の問題などが、複雑に絡み合い本テーマの深化が進まなかった理由となっている。つまり、インド仏教衰亡原因の研究には、文献資料の不足と方法論の未確立という二つの不足部分があり、これを解決することが不可欠と言うことになる。

このような問題点を解決し、インド仏教の衰亡原因を明らかにすること、少なくともその基礎的な研究を可能にする研究法を見出すことを目指したのが、本プロジェクトの方法論的なレベルの目的である。

- ① そのために先ず研究に不足する資料をどこに求めるかについて、新しい資料の領域を探し、その資料的な有効性について検討する。

- ② なお資料の不足分を補うために諸学の方法論を本研究テーマの遂行に用いるための基礎的な検討を行う。

また、①、②の総括的な視点に関するアプローチとは別に、個別研究として

- ③ 玄奘三蔵の旅程やその記述の正確さをイスラームの同時代資料と考古学調査の成果、さらに現地調査によって客観的に考察する。

というような研究目的を設定した。

(2)また、その一方でインド仏教衰亡原因の研究を通じて、これを普遍的な視点から考察することをめざした。つまり、インド仏教の衰亡を単なるインドの一宗教の衰亡に関する研究と矮小化することなく、世界的にみて各地に見出せる事象であり、特に仏教において顕著である宗教弾圧、特に「廃仏」運動のメカニズムについて、宗教と政治、宗教と社会、宗教と国家、宗教と文明というような社会科学的な視点から、これを考察することを目指した。

というのも、仏教という宗教のインドにおける消滅は、単なる一宗教の消滅に止まらず、仏教を支えていた社会集団の消滅である。つまり、仏教を支えていた集団の消滅となる。この事実は、政治的、経済的、文化的な断絶を意味することとなり、逆にいえばこのプロセスを追うことで、社会変動のメカニズムを明らかにすることができると思われる。そこで、インド仏教の衰亡と、他地域の衰亡あるいは、弾圧の事例を検討することとした。まず、

- ① 典型的な廃仏運動の事例として、日本における廃仏運動の検討を考えた。
- ② 中国における廃仏運動の歴史とその推移について検討する。
- ③ インドにおけるヒンドゥーと仏教の関係を普遍宗教と土着宗教との相克としてとらえることで、①②などの仏教弾圧運動の背景を普遍的な視点から明らかにしたいと考えた。

(3)

更に、報告者はインド仏教の衰亡研究を通じて、世界的に宗教紛争が頻発する現在にあって、インド仏教の衰亡の研究から、現在社会が直面する最大のテーマであるイスラームと他宗教の関係性の解明、つまりインド仏教の衰亡とイスラームのインド侵攻とその定着に関する詳細が具体的に検討可能となる。今後イスラーム勢力の世界への拡大という事実に直面する非イスラーム世界において、イスラームとの関係のあり方を検討する上で、本研究は何らかの貢献がなし得るテーマを含んでいると考えた。

というのも、現在のイスラーム脅威論の背景は、イスラームの歴史を具体的に検討した結果というよりも多分に近代的な視点から

の一方的な非難レベルであり、到底これを鵜呑みにすることは出来ない。一方で、イスラームの主張するようなイスラーム被害者論的な発想も、これを全面的に受け入れるわけにはいかない。然し、両者に偏らない中庸の立場は、余り明確にされていない。この点は、大きな問題であると思われる。そこで報告者は、イスラームの他宗教特に、彼らが多神教（カーフィル）と位置づける多神教徒が優勢なインドや東アジアへの侵出により、それらの地域でどのような問題が引き起こされるかを歴史的な事実として検討できる対象として、このインド仏教衰亡の基礎的研究を応用しようと考えた。そして、この問題に総合的な検討を加え得るような視点を見いだそうと考えた。

3. 研究の方法

前述のように、本プロジェクトはインド仏教の衰亡原因の究明を第一義としつつも、さらにそれを発展的に拡大し、仏教という一宗教の衰亡要因の研究に止まらず、イスラームの他地域への拡大、就中多神教徒地域への拡大に伴い発生する諸問題、あるいは社会変動のメカニズムを明らかにするというような、社会科学的な視点、さらには現在社会が直面するイスラームの急激な拡大への基礎研究からの提言を目指すために、多様な視点とアプローチを必要とした。勿論、本プロジェクトといえどもその基本は、宗教学やインド思想史の方法論である文献学的なアプローチにある。つまり、インド仏教衰亡研究に対して、イスラーム文献やパンジャビー語など従来余り仏教研究には用いられなかった言語史料、しかも仏教の衰亡と時代の重なる史料を用いて研究する点に、先ず本プロジェクトの方法論的な独自性がある。さらに、文献的な制約もあり、これに加えるに考古学や文学などの他領域の研究成果も出来る限り涉猟した。その一方で、仏教の衰亡という現象は、単なる一宗教の衰亡というような小さな事ではなく、寧ろ仏教を支えた社会、あるいは文明の衰退であり、衰亡であるとの比較文明的な視点から、比較文明の方法論を用いて、総合的な考察を加えた。

さらに、インド仏教の衰亡を中世インドにおける歴史的なトピックと限定的に捉えるのではなく、これを宗教興亡という歴史上多々見られた現象の一つと一般化し、仏教国の残像が残る日本の仏教研究者的な仏教よりの視点から自由となり、この現象を客観的に検討するために、比較宗教論の視点を重視した。加えるに、インド仏教の衰亡の直接要因であるイスラームの拡大やそれに伴う民族宗教の台頭というような現象が、現在にも通じているとの視点から政治学や国際関係論、社会システム論など社会科学分野の方法

論も多用した。

4. 研究成果

4年間のプロジェクトの成果は、予想以上の成果を得られたものと、計画どおりには実行できなかったもの、今後の研究に引き継がざるを得なかったもの、そして新たな展開が期待されるものと、その成果は必ずしも十善ではない。しかし、4年間の基礎的な研究の成果は、今後の本テーマの発展的な展開という意味では、十分な成果があったと確信している。

研究目的（1）において言及したように、本テーマに関しては世界的に研究が遅れており、先行研究も極めて少ない。①で指摘した欠を補うために報告者は、イスラーム史料『チャチュ・ナーマ』などを用いてきたが、さらに時代はやや下がるが、シク教の基本資料である『ジャヤナム・サキー』のような中世インドの諸語を用いて、それらの中に仏教がどのように描かれているか、あるいは登場するかについて検討を試みた。勿論、この領域は今後更に発展させねばならないが、今後はベンガル語なども含めて非サンスクリット語文献注に見る仏教の存在の検討は、インド仏教衰亡研究における史料の欠如を補う新たな道となるであろう。

また②において指摘したように、多様な方法論的を駆使することで、客観的史料の欠如を補うことを試み、成果を得ることが出来た。例えば、比較宗教学の方法論を用いて、少ない利用を用いて、宗教変容のダイナミズムを総合的に把握する事が可能な比較文明論の手法は、報告者が従来より用いてきたものであるが、今回の研究においてその有効性が一層明確となった。その成果は（『インド仏教の衰亡を如何に考えるか』参照）

以上が基礎的な領域における成果である。目的（2）における成果であるが、先ず全体としての成果であるが、少ないながらも存在する従来の研究成果は、インド仏教史の一部として本テーマを論じていたが、報告者は、寧ろ、世界各地に見られた仏教弾圧との比較研究を重要視した。その際に、歴史的な事実との比較研究、例えば中国の三武一宗の法難や文化大革命、さらには日本における廃仏毀釈との比較研究をおこなった。特に、日本における廃仏毀釈との比較研究は、報告者の独自の視点が凝縮された研究視点であり、またインド仏教研究のみならず、日本文化、日本の近代化、さらには宗教と政治、国家を考える上で大きな成果が期待でき、今後更なる発展が見込まれる分野である。今回は、その基礎作業として、日本の廃仏毀釈発祥の地の一つ、鹿兒島の現地調査も行い、同テーマの基本的な部分である廃仏思想の根源思想の解

明に着手した。

また中国社会科学院との共同研究の道を開けたことは、大きな成果であった。但し、成果発表や今後の共同研究の計画を協議することを予定していた2011年3月22日～24日の訪中は、東北・北関東大震災と福島原発事故により延期となった。しかし、早晚実現し、具体的に展開する予定である。一方、歴史的事実の比較のみならずこれを比較文明的な視点から、宗教、国家、ナショナリズム、民族宗教、あるいは改宗等々のキーワードを設定し、これらからインド仏教の衰亡という現象を、文献学的客観性を踏まえつつ、社会科学の理論モデルの構築により、より普遍的な現象として捉える視点を構築した。具体的には、仏教とヒンドゥー教(土着宗教・民族宗教)との相克とイスラームという普遍宗教との三つ巴の關係の解明において、宗教の意味や意義、さらには社会的働きなどを含めた広範な研究視点を構築した。

この視点の延長として、現代社会が直面する宗教間、あるいは宗教を中核とする文化・文明間の紛争に関する系統だった分析を可能とする視点の構築を試みた。つまり、インド仏教の衰亡という歴史的な問題を、現在社会において我々が直面する問題と比較検討することで、両者の理解を総合的に深め得る事が出来るという視点である。(「イスラームとの共存」参照)

これらの点は、2009年12月のマレーシア・クチンで行われた「在家仏教者国際会議」、2010年3月8-9日の韓国東国大学、およびその関連研究所での講演や討論、2010年6月5-7の台湾大学における発表においても明確にした。

一方、計画が実行できなかった領域としては、パキスタンのシンド地域における玄奘三蔵の旅程の確定というテーマがある。パキスタンはここ数年急速に社会状況が不安定となり、さらに調査を予定していた2010年8月には、調査地域全域が極めて深刻な水害に見舞われるというアクシデントが有り、この地域の調査を断念した。その一方で、バングラデーシュの調査は実行でき、末期インド仏教の衰亡研究に不可欠な多くの史料を入手した。

以上を踏まえて総括するならば、本研究プロジェクトの成果は「インド仏教の衰亡原因の研究」というインド宗教史、あるいは仏教・仏教史周辺の諸問題解明という点でも重要であり、それに関しても多くの成果を世に問うことが出来た。しかし、それに止まらず本研究の意義は、現代社会が直面する多宗教間の共存の実現という今日的課題、特に、イスラームと多神教社会の共存の問題を考える上で、非常に大きな意味のある研究であり、この視点の意義付けが明確に出来た点は、大

きな成果であった。また、本プロジェクトの成果を国際会議において発表し、中国、韓国、インド等の研究者とのネットワークが形成された事は、今後の研究にとって大きな成果であった。また、総括として、成果報告書に代わる報告書の作成も進行中である。(「インドにおける寛容思想とその展開」参照。なお本論文は、中国社会科学院・孫晶教授により翻訳がなされ同院の研究紀要集に掲載されることになっている。掲載号は未定)

5. 発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- ① 「文明論から見た現代社会の問題点」『都市問題』(102-1号)東京都市調査会、2011年32-37ページ。
- ② 「癒しと鎮めの仏活論」『大法輪』2010年10月号、2010年、48-56ページ。
- ③ 「在家仏教主義の可能性」『在家仏教』2010年9月号、2010年、46-57ページ。
- ④ 「インドにおける寛容思想とその展開」『インド宗教思想の多元的共存と寛容思想の解明』東方研究会、2010年、240-283ページ。
- ⑤ 「イスラーム経済思想とその現代的意義」『経済社会学年報』32号、2 経済社会学会、2010年、20-29ページ。
- ⑥ A study on the relation between Japanese lay Buddhism and Economic ethics "Introducing the Faculty of PolicyStudy" F.P.S., Chuo Univ., 2010. pp.15-23.
- ⑦ 「インドにおける『宗教と倫理』の關係性の考察」『宗教研究』361号日本宗教学会、2010年、313-337ページ。
- ⑧ 「日本人の宗教観の背景にあるもの」『麗澤大学学祭ジャーナル』16-2号、麗澤大学国際経済学部、2010年、37-70ページ。
- ⑨ 「禅とイスラーム神秘主義思想における共通性について」『比較思想』33号、比較思想学会、2007年、59—67ページ。

〔学会発表〕(計5件)

- ① 「仏教の寛容思想」第3回『東方人文思想国際学術検討会』(華梵大学・台湾大学共催)、台湾、2010年6月7日
- ② 「『大唐西域記』とイスラーム史料との比較研究」第3回『東方人文思想国際学術検討会』(華梵大学・台湾大学共催)、台湾、2010年6月6日
- ③ 「インド仏教の衰亡に関する研究成果」

第3回『東方人文思想国際学術検討会』
(華梵大学・台湾大学共催)、台湾、2010
年6月5日

- ④ 「中世インドにおける仏教の衰亡」韓
国・東国大学、ソウル、2010年3月9・
10日
- ⑤ 「インド仏教と日本仏教その世俗主義思
想の展開」第三回居士仏教世界会議、マ
レーシア、クチン、2009年12月23日
—26日

〔図書〕(計9件)

- ① 編集：執筆『浄土教事典』(東京堂)2011
年。(関連項目37執筆)
- ② 監修：執筆『仏教入門』ナツメ社、2010
年、271ページ
- ③ 分担執筆「イスラームとの共存」(奈良康
明ほか編著)『仏教の出現』(シリーズ新
アジア仏教史)佼成出版社)2010年
280-329ページ
- ④ 項目執筆「宗教と文明」(星野英紀他編)
『宗教学事典』平凡社、2010年90-91ペ
ージ。
- ⑤ 単著『癒しと鎮めと日本の宗教』北樹出
版社、2009年209ページ。
- ⑥ 編著『世界の宗教問題の基本』青春出版
社、2008年、219ページ。
- ⑦ 単著『インド仏教の盛衰に何を学ぶか』
(相国寺教化活動委員会)2008年、225
ページ。
- ⑧ 単著『ブッダとムハンマド』サンガ出版
社、2008年、293ページ。
- ⑨ 共著「インド仏教の衰亡」『南アジア史』
山川出版社、2007年、96-101ページ。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

保坂 俊司 (HOSAKA SHUNJI)
中央大学・総合政策学部・教授
研究者番号：80245274

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：